

# 学校をつくろう!通信

がっこう・N.P.O.



第149号

## 学校の役割

## その 126

総務省は2020年からの国勢調査に最終学歴が小学校卒業の調査項目を加えました。因みに最多は北海道で5万4,286人でした。従来からあった調査項目の未就学者(小学校に入学していないか卒業していない方)数と合算することにより義務教育未修了者数が正確に把握できるためです。

その結果、最終学歴が小学校卒業の方が全国に80万4,293人、未就学者の方が9万4,455人いることがわかりました。合計すると89万8,748人が国勢調査上の全国の義務教育未修了者数です。沖縄県は最終学歴が小学校卒の方が1万5,938人、未就学者数は2,391人です。義務教育未修了者は1万8,329人、人口の約1.3%です。

2010年と2020年の国勢調査のどちらでも実施された調査項目の未就学者数でこの10年間の変化をみると全国では2010年が12万8,187人、2020年が9万4,455人でした。沖縄県は2010年が6,541人、2020年は2,391人でした。減少率は全国が26.3%、沖縄は63.4%でした。未就学者数を減少率とは別の数字で見ると沖縄県は人口1万人あたり2010年の調査では47.0人でしたが10年後の2020年の調査では16.4人という結果になりました。激減です。算数・数学が苦手な減少率や何々当たり何々に自信がありません。間違えていたら申し訳ありません。

総務省の国勢調査の膨大な資料の中から学歴に関する情報にたどり着き、これまた膨大な数字の中から必要な数字をやっとこさ見つけ出し、電卓をたたきながらああでもないこうでもないやっていたら、大昔の体験が蘇ってきました。小学校1年生のあの時です。

隣に座っている親父のプレッシャーを受けながら、両手では足りずに両足の指も駆使して足し算をして

います。どうしていいかわからなくなり、適当な答えを仕方なしにノートに書くことを何度も繰り返し、その都度親父の顔を窺うと彼はだんだん呆れたような顔で僕を見下ろすようになります。あきれ顔というより今思えば落胆と憐憫が入り混じったような複雑な表情でした。鉛筆を持つ手に力が入りやがて大粒の涙が一粒ポトンとノートに落ちると見る見るうちにノートは涙でいっぱいになりました。ノートの数字が涙のレンズで大きく歪んで見えました。その後のことは思い出せません。

あの時の自分を今眺めてみると、自分なりの理屈を始めるうちは一生懸命考えていたのだと思います。だから、両手でたりず両足の指まで親父に分からないように曲げ、その指を頭の中に想像しながら答えを搜していたのでしょう。今となれば星野少年に「自分なりの理屈があれば十分だよ!」と言ってあげられたのに君はもう遠くに行ってしまったな!

主眼は国勢調査です。全国と沖縄の差ははっきりしています。未就学者数の減る値の大きさです。皆さんはこの数字をどう受け止めますか?

沖縄県教育委員会の担当者の方と夜間中学校を巡って意見交換する場がありました。10年以上も前のことだと思います。木で鼻を括るような言葉と態度に業を煮やし、「穿った見方をすれば夜間中学校の支援や設置を先送りにし、時が解決するのを待っているように受け取れる」と言ったことがあります。生徒の皆さんの平均年齢は70才を越えていました。

沖縄県は夜間中学校の設置を検討課題として先送りしているように受け取れます。紙媒体等で行われた調査の結果、県民のニーズが少なかったことが理由の一つです。義務教育未修了者が1人でもいれば、学ぶ権利を保障するために学校を設置すると考えるのが教育行政を託された沖縄県の待ったなしの仕事であると僕は思っています。(ほ)

## がじゅまる しんかめちやー



(生徒・学生のコーナーです)

### 「生徒自主企画ハーリー体験」

中等部 平良 栄太

自分は小学生の時にもハーリーを経験していて、その時にも文章を書きました。そして今年もハーリー実行委員をしていて中学生最後のハーリーで、一区切り着くのもう一度文章を書いています。

今年、6月から体幹を鍛えるトレーニングを「朝の英会話」の終わりにやる事と、ハーリー練習を陸でやって来ました。7月からは海でサバニという船に乗って練習をしていましたが、予定していた5回は、コロナの影響で中止になってしまい、1回の練習で本番を迎えました。1回目の練習の時には久しぶりに船に乗ったのでとても嬉しくてずっと乗っていたい気分でした。

自分が初等部にいた頃、初めて漕いだ時は周りに全く合わせられず、辛くて途中で漕ぐのをやめたり、前の人に合わせられず自分のペースで漕いだりフォームが全然綺麗じゃなかったのを今でも覚えています。

初等部六年の時には馬天ハーリーに出ることが出来ました。その時は1番後ろに乗っていたんですが、周りのペースに合わせる事に必死でした。ですが終わった後に舵取りをやっていた珊瑚舎スコーレの講師竹ちゃんに褒められた時は飛び上がるほど嬉しかったのを覚えています。

今年やった自主ハーリーは、参加してくれる生徒

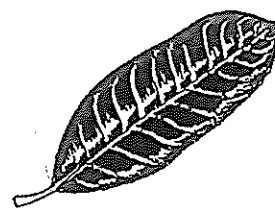
のほとんどが漕いだことの無い人が多くて、練習日はゆっくり漕いで合わせる練習を中心にやっていました。その時自分は1番前を漕いでいて、ペースメーカーをしていました。1番前で漕ぐのはほとんど初めてで少し自信がなかったのですが上手くできたと思っています。その日の2日後に本番がありました。

2日目の筋肉痛があつてコンディションは良いとは言えませんでした。が、練習含め本番レース全てに出場しました。きついし辛かったし漕ぐ時に膝が擦れたり、腰が痛くなったりしていましたがそれよりも楽しさが勝っていました。

後ろに乗っていた人達には、もうちょっと速めに漕いでーと言われてたり、もうちょっとゆっくり漕いでって言われたりほぼ初めてで後ろの人達には少し申し訳ないと思った所が多かったのですが、トーナメントでは2位まで行けました。来年は1位を目指して頑張りたいと思います。

\*例年開催されている地元の馬天ハーリー大会はコロナの為、今年も中止となりました。地域の方々の協力で生徒達の自主企画、体験ハーリーをさせていただきました。

## ふくぎのふぁー



(講師・スタッフのコーナーです)

『朝から英会話』

佐久本 順子

ハロハロ。(´▽`)

経理のお手伝いと朝の英会話(基礎クラス・週2)を担当した佐久本順子です。友達に「簿記できる？」と聞かれ、「自分がお手伝いできることなら」と、今

年の1月から珊瑚舎に来るようになりました。はじめは経理のお手伝いだけでしたが、「留学の経験を活かして、英語の楽しさを教えてみない？」と声をかけられ、「20分ならできるかなあ〜」ということで、4月からは英会話もスタートしました。

英会話を担当したけど…、実は…、英文法が苦手なで、学生時代に赤点(0点)をとったことも…。ただ、小学生の時、英会話を習ったことがあり、その時は英語が好きで、英語を話している先生が好きでした。そんな経験があったからか、大人になって「英語を学びなおしたい！」と思うようになり、26歳の時に働きながら夜間大学へ。学んでいくうちに、「やっぱり、一度は留学したい。海外に住んでみたい。」と思うようになり、一年間だけシドニーの語学学校へ行きました。

ホームステイ先の家族やいろんな国から来ているクラスメイトと会話で使えるのは英語だけ。それぞれの国の文化などを教えてもらい、放課後や休日はみんなで観光にでかけたり。みんなと話をすることで、ますます英語が好きになっていきました。

あいかわらず英文法は苦手だけど、「英語で話したい！」という気持ちは変わらずにもっています。そんな私が、「英語きら〜い」って言っている子供たちに少しでも英語を好きになって、将来、「海外に行ってみたい。住みたい。友達をつくって英語で話したい」というきっかけが作ればとの思いで授業を担当しました。

伝えきれたかは分からないし、どのタイミングでみんなが英語を好きになって、勉強したい！って思うかは分からないけど、「じゅんこ、赤点(0点)とったけど、英語しゃべってたな。オレもできるかな。」っていう日がきたらと思います。(笑)



## ～学び舎の一風景～

2022年7月30日、コロナ感染者数が増える中で、入場制限をしながらも前期学習発表会「まにまに祭」を行いました。4日間の準備期間を終え、生徒達は展示や舞台発表に取り組みました。その中から高等部2年生の「歴史総合」講座での発表を紹介いたします。(舞台発表の為、そのまま記載しております)



アンケート  
(向い雲)

こんにちは。

私たちは、歴史総合の授業で慰霊の日に向けて準備したこと、慰霊の日の特別授業でガイドをしたことをもとに発表します。ガイドをするため、事前に生徒アンケートの回答をもとに話し合い、魂魄の塔、米須海岸、平和の礎、韓国人慰霊の塔を慰霊の日の行き先に決めました。

同調圧力、ロシアとウクライナ、ミャンマーそれを今につなげるのがテーマとなり、今につなげて話し合うことで理解が深まると考え、慰霊の日当日、グループトークの場を設けました。

グループトークではどうして戦争をしてはいけないのかをグループで考えました。

グループトークで出した内容は展示コーナーにはってあるのでぜひ見てください

それぞれが魂魄の塔、米須海岸、平和の礎、韓国人慰霊の塔について調べたこと、事前のフィールドワークをもとに、現地でガイドをしました。そして慰霊の日に向けて「花はどこに行った」(注\*)という曲をうちな一口に変えて歌いました。次の高等部の沖縄古典音楽の発表で披露するのでぜひ、聞いてください

みんなが慰霊の日を通して、何を感じたのかと、学びをより深めるため、アンケートも取りました。アンケート結果も展示コーナーにあります。それぞれ、慰霊の日を通しての感想を、作文にしました。今日は2名が発表します。(仲里守礼)

(注\*)「花はどこへ行った」(ピート・シーガー作・訳詞池澤夏樹)を沖縄古典音楽講座講師、宮城竹茂(カキヤン)さんがうちな一口に変え、生徒スタッフで歌いました。詳しくは前148号「学校の役割」をご覧ください。

### 「慰霊の日の感想」

横川 天南

私は沖縄戦についてまだまだよく知りませんが、今回、ガイドをするために、真剣に考えることができました。

アンケートの質問を考える時も、みんなに教えてほしいことがたくさんありましたが、何がいいか探しているうちに、何のために学ぶのか分からなくなってしまいました。そしてそもそもわかっていなかった、考えを持っていなかったことに気づき、何のために学ぶのか、ということ質問しました。こんなことでも、私の大切な気づきになったと思います。

初めて慰霊の日に、魂魄の塔と平和の礎に行って、祈る人達やお供え物を見ました。

人々を見ていて、今までで一番身近に、生きてる戦争を感じたと思います。教科書を見ていると、いろんな名前の戦争が年代ごとに並んで、コレクションみたいだけれど、実際の戦争はそんな枠で考えられるものではありません。1人1人に起こった1つ1つの出来事をすべて合わせて、戦争と呼ぶのだと思いました。これから平和について学んでいくうえで、慰霊の日の感覚を忘れずに持っていたいです。

みんな一緒に学んでいるけれど、アンケートに対する答えは1人1人全く違いました。たくさんいい意見に出会えて、本当に良かったです。答えてくれた皆さん、ありがとうございました。みんなの理想の社会の在り方、理想の自分についても、聞いてみたいと思っています。



カサビ ムー  
(重ね雲)

### 「慰霊の日」

橋本 千鶴

去年、慰霊の日の授業で日本兵が住民へ酷い行いをしていたこと、組織的戦闘が終わった6月23日以降も沖縄戦が続き、沢山の犠牲者が出続けたことを初めて知った。家族で唯一、戦争を体験したことのあのおじいちゃんは、私が赤ちゃんだった頃に亡くなっているから、そういったことを聞いたことがなかった。

沖縄が復帰してから、そこまで時間は経っていないけど、自分にはとても遠いものを感じた。

私は沖縄に長いこと住んでいるわけでもなく、もしかしたら、家族は全員内地出身だから、私の先祖にも沖縄戦で兵隊として戦っていた人がいたかもしれないと思い、慰霊の日を通して、沖縄戦のことをどう受け止め、向き合ったらいいのか、落とし所がわからなかった。そして、どこか他人事に捉えていて、いまいち身に入っていないようなにも思う。平和の難しさを知った。

今年は、高2がメインで実行委員になって、ガイドをすることになり、慰霊の日の特別授業に向けて準備をしていった。ガイドをすることは初めてで、謎に怖かった。言葉で伝える難しさを感じた。深くて重い、一つ一つ言葉にしていくのが重たかった。自分の感じたことをどの言葉に当てはめたらいいのかわからなかった。戦争のことと自分の感情の入れ具合のバランスもわからなかった。

当事者から直接聞いた話でなく、ネットや資料から拾って話すのは、なんだか遠いもののような気がして怖かった。わからない気持ちと不安でいっぱいだったけど、みんなが取り掛かっている姿をみて救われた。

平和の礎の各ゾーンは、沖縄出身者と県外出身者と朝鮮人の方々と敵国だったアメリカ兵の礎が隣り合い、お名前が刻まれている。そのことに衝撃と、世界規模での平和を願う気持ちを感じ、名前があるという大切さを感じた。

午前に行った「なんで戦争は悪いのか、なぜ戦争はなくなるのか」のグループトークセッションで、みんなの意見を聞いて、自分にはないものに触れら

れて嬉しかった。慰霊の日の授業で、ロシアとウクライナの戦争やミャンマーのクーデターなど、今と繋げること、同調圧力がテーマに上がったけれど、自分の中でそれに触れて考えを深められていないのを感じ、残念で悔やまれ、もどかしかった。

最後のアンケートでは、内省して核心を、断片的でも言葉に表すことができてよかった。アンケートの中に、愛があるから戦争が起こるという意見についての質問で、この言葉は自分を見失い愛を操られた人、心を操られてしまった人の言葉なのではと感じ、どんな状況であっても、表面だけの情報に囚われ流されず、自分の足で立ち考えるものの見方、多角的想像力を身に着けていたら、戦争が起きてしまっても、それに翻弄され飲み込まれてしまうことはないように思った。そして、ほっしーさんの「愛する為に学びましょう」という言葉は「あなたの愛の本質を見つけてください」ということなのかなと思った。

今回の慰霊の日を通じて、沖縄戦を忘れてはいけない、沖縄戦が起きた上で、今の平和があると深く感じた。平和を願う心が大波となって広がってほしい。

命とはなんだろうと改めて疑問に思い、どんな社会でも命ある生き方をしたいと思った。ここで見聞きして感じたことを胸に刻んで、学び、模索していきたい。



2022年6月23日「慰霊の日」今日の一枚

## 結塾 J&S スタッフを紹介します！

三枝 菜美子 (津嘉山教室担当)

結塾 J&S は、珊瑚舎が沖縄県の委託を受けて運営している学習塾で、2012年度から始まり、今は西原、与那原、南風原、八重瀬に全部で6教室ある。小学生から中学生(一部高校生)が放課後に通い、国語や算数(数学)などの学校の勉強と、うちなーぐちやアート、文章講座などの独自の授業がある。10年程前から社会に認識が広がり、国や県の予算が当てられるようになった、所謂「子どもの貧困対策」の一環としての「学習支援事業」ということになる。家庭の経済状況が事業の対象者を決める基準になるが、児童・生徒の間に家庭の経済状況という線引きはない。通いたい児童・生徒が通える場にしたいということを受託を受けた当初から珊瑚舎は県に要望し、その形で現在まで運営している。様々なデータのひとつに、経済的に厳しい家庭の児童・生徒はそうでない場合と比べて高校進学率が低いという調査結果がある。この事業は、高校進学率を上げることも求められている。

その日も夕方4時を過ぎた頃、小学生がやってきた。大体10名ほど集まる。セミを捕まえてやってきた小学2年生。それを見てキャーと叫ぶ、こちらも小学2年生。その彼のことを書きたいと思う。彼の高い声は頭に響くので、私は眉間にしわを寄せる。周りの小学生も講師も困ったなあと言わんばかりの顔をしている。声をおさえてくれないか話しかけるが「ちょっと待って！」と言われ、こちらの思うようにはいかない。学校の宿題を始めようと声掛け、スタートするのにいつも15分位かかる。自分で内容を決める宿題は2桁の足し算の筆算にした。見ていると全体的に「1」が多い。一の位が「6+4」になってしまった時は、問題を作った自分にクソッと言い消しゴムを取る。繰り上がりは苦手なことが分か

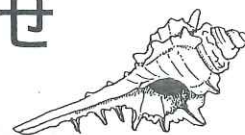
る。学校に行き渋る様子を想像した私は「〇〇、ちょっと大事な話をしたいんだけど・・・学校、楽しい？」と質問した。こうして文章で振り返ると唐突で自分本位の質問だと恥ずかしくなる。純粋な質問ではなく、その裏に大人の意図があることを感じたようで彼は少し警戒した。「楽しいよ」とすぐに返ってきた。給食と授業が楽しいのだと他の児童に聞かれないように私の耳元で言った。「困ることはある？」と聞いたら、「国語は字を写すのがついていけない。算数は解けない問題がたまにある。」と言った。続けて「本当はどんなふうになったらいいと思うことはある？」と聞くと「本当は授業が好き」と答えた。私の質問は誘導的で、自己満足的であることを自覚したいのだが、それを一旦横に置いて言えば、彼の「授業が好き」はハッキリした言葉で本心であるように聞こえた。

「〇〇の気持ちを聞かせてくれてありがとう」と伝えてこの話は終わった。「勉強が嫌いな子」なのか。「本当は授業が好きだな子」なのか。それは大人側が持っているものさしが大きく影響していることに気づく。同時に「本当は授業が好きで児童や生徒」が学年が上がり、勉強や学校からドロップアウトする、その体制を見直さないといけないと思う。

以前、結塾のスタッフで珊瑚舎の授業も受け持つ人にこんなことを尋ねてみた。結塾ではスタッフが講師に対して生徒のことを説明する時「数学は基礎レベルで・・・」と学校の成績を引き合いに出すことが日常的で、それが全てではないにしても相対的な評価で生徒を説明することが多い。生徒同士も、クラスメイトのことを言う時「あの人は頭がいい人で・・・」とかその逆の言葉で形容するのをよく聞く。珊瑚舎は、講師が生徒を、あるいはクラスメイト同士をどんなふうに見ることが多いのか尋ねてみた。その人は少し考えて、「あの人は、こういう考えを持っている人」という捉え方かなあと言った。私はその言葉に深く頷いたのを覚えている。ひとつではないものさしを持つ「場」を表した言葉に、納得したのだと思う。

珊瑚舎と公立の学校の狭間にいるような気持ちで働いている。狭間に立ち気づくこと・見えることを言葉にして、やっていきたい。

## お知らせ



### 第一回企画展

『天空の波打ち際博物館』開催  
～「とんでもないおとしもの」展示～

開館日時：8月13日(月)～9月4日(日)

10時～18時

(閉館日なし・入場無料)

「天空の波打ち際」実行委員会

### ★ ★ 事務局便り ★ ★

★昼間部は長期休みの前に3日間連続で「がんまり」の作業があります。夏休みを前に茫々と草が茂った「山がんまり」の草刈りを一気にやっけてしまおうと決めて、参加者全員が鎌と草刈り機を手にししました。いつもなら暑い、だるいと文句がでるところですが今回は気合十分。使用后、使用前(作業のbefore-after)がはっきりと分かり、生徒達も達成感のあるいい表情をしていました。

最終日の午後は校舎前の「天の浜」で、泳いだり、綱引きをして楽しみました。

9月11日まで夏休みです!

### ★ ★ ★

●今年度(6月1日～7月31日)寄付・カンパを頂いた方々  
石野裕子市野寿子大城春喜小渡津子鹿糠文子北上田登久子城間あずき当山幸江長嶺由紀子真津昭夫矢崎智章山田道子湯本貴和與儀勝子与那覇晴海石田みどり竹内新伸村宮子横山真弓萩原真美照本祥敬岩月住江三枝菜美子所扶久代手塚賢至大城博三浦幸子式部恵子森口美千恵丹羽雅代家門収一上田秀一盛口佳子橋川由美子助川寿美子武田富美子辰巳万里子安里桂子安田直美下地孝法岸暁美城間栄順村上呂理須田恵坂本新一郎出口信一西原邦男泉恵子神谷郁雄名嘉光生大西千恵柴田健安里英子比嘉功大久保博之野村佳雄古堅苗長谷川途子宮里道子安田圭太郎松山倍代大島人美高柳英子宜保洋子

発行者：珊瑚舎スコーレ

事務局 遠藤知子 樋口佳子

住所：〒901-1414 南城市佐敷津波古 509-4

Tel：098-975-7781 Fax：098-975-7783

Mail：info@sangosya.com

URL：https://sangosya.com